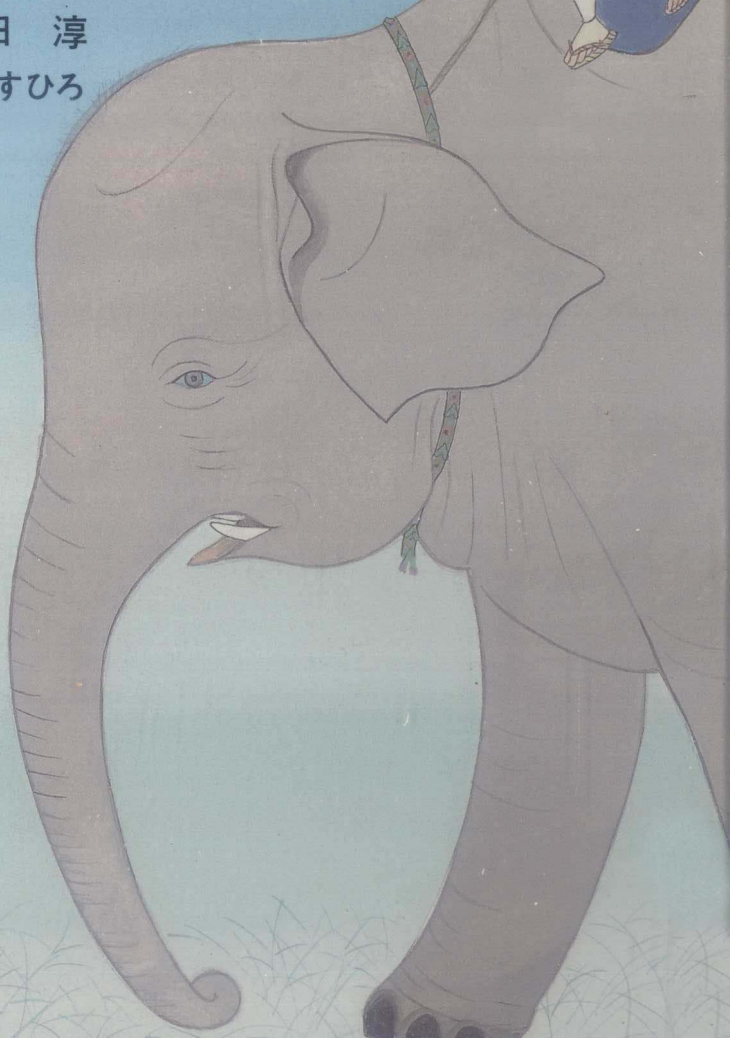


おれふんと

——にっぽん左衛門少年記——

作／那須田 淳

絵／蓬田やすひろ

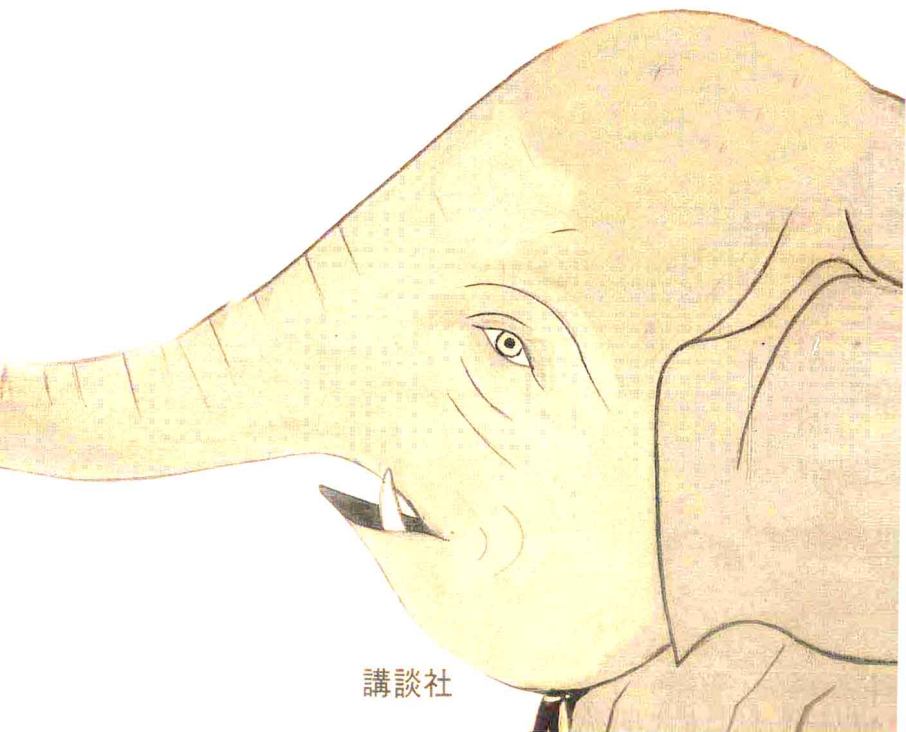


おれふんと

——にっぽん左衛門少年記——

作／那須田 淳

絵／蓬田やすひろ



講談社

おれふぁんと

——にっぽん左衛門少年記——

N.D.C. 913 253p 20cm

1994年9月20日 第1刷発行

定価はカバーに表示してあります。

著者／なすだ じゅん那須田 淳

発行者／野間佐和子

発行所／株式会社 講談社

〒112-01 東京都文京区音羽2-12-21

電話 出版部 03-5395-3535

販売部 03-5395-3625

製作部 03-5395-3615



印刷所／豊国印刷株式会社

半七印刷株式会社

製本所／島田製本株式会社

©Jun Nasuda 1994 Printed in Japan

落丁本・乱丁本は、ごめんですが小社書籍製作部あてにお送りください。
送料小社負担にておとりかえいたします。なお、この本についてのお問い合わせは児童図書出版部あてに願いたします。

ISBN4-06-207251-3 (児図)

☐ <日本複写権センター委託出版物> 本書の無断複写(コピー)は著作権法上の例外を除き、禁じられています。

おれふあんと
もくじ

プロローグ……………5

I グリーン・スリーブス……………9

II カツパ騒動……………47

III 象ぞうつか使いの少年……………90

IV 童子わっぱざわ沢の春……………131

V おれふあんと……………184

エピローグ……………247



あとがき……………252

絵・装丁……………蓬田やすひろ



プロローグ

延享元（一七四四）年、初秋

夜はもうすぐそこだった。

雑木林のなかを歩いてきて、木立の陰をぬけでると、おれは、あたりを見わたした。

空はまだわずかに明るみをのこしていたが、むこうの小さなお堂の屋根は、まわりの草むらとおなじように、すでに紺色の闇にとけこみはじめていた。

あたりに人影はない。

よし。

おれは、せまいあき地をすばやくよこぎって、お堂のなかからだをすべりこませた。

お堂のなかはうす暗く、むっとした空気がよどんでいた。

この壁がくずれかけた古いお堂は、庚申堂といい、宿場はずれにあるので、日が暮れるこの時刻になると近よる者はほとんどいない。

おれは、床板をめくり、はらばいになって、床下にかくしてある木箱から着物の入ったふくろをとりだした。

黒装束に着がえ、腰にたばねた縄をさげる。それから黒革の頭巾をかぶって、ほおに、薄金の仮面をあてた。

あとは自分どもがむかえにくるのを、待つばかり。

いまじゃ、世間から、怪盗にっぽん左衛門などとよばれているおれだが、この庚申堂に立ちよると、ふしぎに子どもころのことが思いだされて、なつかしくなるのもみょうな話だ。

腕をのばして、箱のなかから刀をとりだそうとしたとき、なにかにふれて、かすれた弦の音がした。

おっ。

なんぼんがつき
南蛮楽器のリユートだ。

ひさしぶりだ。

箱のすみにしまったまま、しばらく手にしていなかった。

おれは、床にすわると、この大きないちじくのような、ふうがわりな形をした楽器をかかえた。

うつすらとかぶったほりをはらって、指で弦をはじいてみる。

暗闇に、調子のはずれた音が、にぶくひびいた。

あの曲は、まだひけるだろうか。

出だしは、たしか、こんな感じだったんだが。

指が、思うように動かなかった。

それでもしばらくためしているうちに、しだいに音がつながってくる。

その静かな旋律は、それを習いおぼえた遠い日を思いださせた。

目をあげると、くずれた壁のすきまから、わずかに夜空がのぞいていた。

そういやあ、通春さまから、このリユートをもらったとき、おれは十歳だった。まだ、万五郎とよばれていたころだ。

おれは、リユートをひくのをやめ、夜の深い闇をじっとみつめた。

たしか、通春さまにはじめて会ったのは、今夜のようにむし暑い、見付のはだか祭りの晩

だった。

天神社の境内は、はだかの男たちであふれかえっていたっけ。

オッシ、オッシ、オッシ。

ホイサ、ホイサ。

ふいに、記憶の底から、男たちの祭りのかけ声がわきだすようにきこえてきた。

I グリーン・スリーブス

1

夜の街道に、無数の提灯がゆれている。
腰囊ひとつのはだかの男たちが、こぶしを天につきあげながらおどりくるう。

オッシ、オッシ、オッシ。

鈴の音と男たちのかけ声が、近くの村から見物に集まってきた数万の群衆の歓声とひとつにまざり、海鳴りのように東海道見付宿をおしつゝむ。

天下に名高い、矢奈比売天神社のはだか祭りである。

かけ声とともに、はだかとはだかがぶつかりあい、汗あせがとび散ちる。男たちの腰こしにつけた蓑みののわらがこすれあって、もうれつに熱あつくなるので、ときおり水がかけられ、それが蒸気じょうきを生んで、あたりいちめんもうもうとかすんで見える。

むせかえるしめったわらのにおい。

男たちは、年寄としよりも若い者わかものもいつしよになつて宿しゆくじゆうを練り歩あるき、夜四ツ半（午後十一時）をすぎるころから、町まちごとに順番じゆんばんに天神社の境内けいだいへ走りこんでくる。

その練ねりは、疾風はやてのようにあらあらしいので、うっかり近づいてとばつちりをうけ、けがをすることもめずらしくなかった。

「オッシ、オッシ。」

「ホイサ、ホイサ。」

提灯ちようちんの光が、はげしくゆらめきながら、熱気ねつきで顔を赤らめた男たちを照てらしたす。

つぎつぎと入ってくるはだかの男たちの集団しゅうだんについて、神社じんじやの境内けいだいへかけのぼってきた万まん五郎ごろうとお雪きくの、それに菊之助すけのすけと力丸りきまるは、おどりを見物けんぶつしようと拝殿はいでん前まえへいそいだ。

だが、もう何重なんじゆうにも人垣ひとがきができてしまつていて、前にでられない。

夜になつても気温きおんはさがらず、そのうえ、祭りまつの熱気ねつきがくわわつて、四人とも汗あせまみれだつ



た。

「力丸、おまえがのろいからだぞ。」

「うるせえ。」

いい合いをはじめた菊之助と力丸を横目で見て、万五郎は、とつさにあたりを見わたし、雑踏のむこうの幹の太い松のほうへ走っていった。

わらじをぬいで、はだしになるとすると松によじのぼっていく。

享保十三（一七二八）年八月十日のこの日、十歳の万五郎は、同じ年の菊之助と力丸をつれて、金谷宿から、七里（約二十八キロ）の道を歩いて、一つ年下でおさなじみのお雪のいる見付宿まで祭り見物にやってきたのだ。

見付宿は、江戸（いまの東京）と京都をむすぶ東海道のまん中あたりにあって、街道の要所としてさかえているが、祭りのあるこの日は、いつもにましたいへんなにぎわいだっ

た。
万五郎が、松の太い枝にまたがると、下から、おてんばのお雪が、いつものように自分の小さな鼻に指をあてて、せがんだ。

「万さ、わたしも。」

「しょうがねえな。」

万五郎まんごろうは、仲間なかまたちのなかでいちばん背せが高く太ふっている力丸りきまるにむかつて、

「おい、おまえ馬うまになって、お雪ゆきを手てつだつてやれ。」

「えっ、おれが？」

力丸りきまるは、むくれてほおをふくらませたが、しぶしぶ幹みきの根ねもとにつかまって、腰こしをつきだす。

「ほらよ。」

力丸りきまるの腰こしをふみ台だいにして、お雪ゆきがのぼると、そのあとから、こがらな菊きく之助すけが、

「ごめん。」

と、ちゃっかり力丸りきまるをふんづけて、リスのように身みがるに枝えだにとびついた。力丸りきまるは鼻はなをぶうつとならした。

三人さんにんが松まつの枝えだに陣じんどるのを見た力丸りきまるは何度なんども松まつの幹みきからずり落ちおながら、やっとのことで万五郎まんごろうのそばまでのぼってきた。

枝えだが大きくゆれる。

「あつ、おまえはくるな。もう、場所ばしよがないぞ。」

菊之助きくのすけにいわれて、力丸りきまるは、ますますむきになって枝えだをゆすつたので、お雪おゆきは落ちそうになり、万五郎まんごろうに思わずしがみついた。

「あつ、ばか。」

そのひょうしに、万五郎まんごろうは、手にもつていたわらじを落おとしてしまった。

あわてて下を見ると、わらじは、運うん悪く通りかかった侍さむらいの肩かたにぶつかつて、地面じめんにころがったところだつた。

(まづい……)

万五郎まんごろうはどなれるかと思ひ、はつとしたが、菅笠すげがさをかぶつた旅たびすがたの侍さむらいは、たいして氣にしたふうもなく、万五郎まんごろうのわらじをひろつて、

「ほらつ、いくぞ。」

と、投げかえしてくれた。

祭まつりの明あるい提灯ちようちんにうつしだされて、菅笠すげがさの下に、おだやかな笑え顔がおがちらつと見えた。

まだ若い侍さむらいだつた。

それはほんのわずかな瞬間しゆんかんのことで、たちまち、侍さむらいは、見物けんぶつの人のなかにまぎれてしまった。